

平成31年3月1日

第22回文化庁メディア芸術祭賞の決定について

文化庁では、平成9年度より文化庁メディア芸術祭を実施し、優れたメディア芸術作品を顕彰しております。この度、第22回文化庁メディア芸術祭賞が決定しましたので、お知らせいたします。

1. 応募概況

本年度は、平成30年8月1日（水）から10月5日（金）までの間、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において作品を募集しました。本年度は4,384作品が寄せられました。また過去最多となる世界102の国と地域からの応募がありました。

2. 贈賞

部門ごとに、受賞作品（大賞、優秀賞、新人賞）を決定し、それぞれ賞状、トロフィー、副賞（大賞100万円、優秀賞50万円、新人賞30万円）を贈呈します。

また、メディア芸術分野に貢献のあった方々に功労賞を贈呈し、賞状とトロフィーを贈ります。

3. 贈呈式・受賞作品展

贈呈式は2019年5月31日（金）、受賞作品展は2019年6月1日（土）～16日（日）に、東京・お台場の日本科学未来館を中心に開催を予定しています。

※詳細については文化庁メディア芸術祭事務局〔CG-ARTS 内〕広報担当まで御連絡ください。＜広報問合せ先＞ TEL：03-3535-3501 FAX：03-3562-4840

＜担当＞文化庁参事官（芸術文化担当）付メディア芸術発信係

文化戦略官 柏田 昭生（内線 2858）

参事官補佐 伊野 哲也（内線 2062）

メディア芸術発信係長 伊藤 由美（内線 2895）

電話：03-5253-4111（代表）

第22回文化庁メディア芸術祭 受賞作品発表

応募総数4,384作品から、ついに受賞作品が決定！

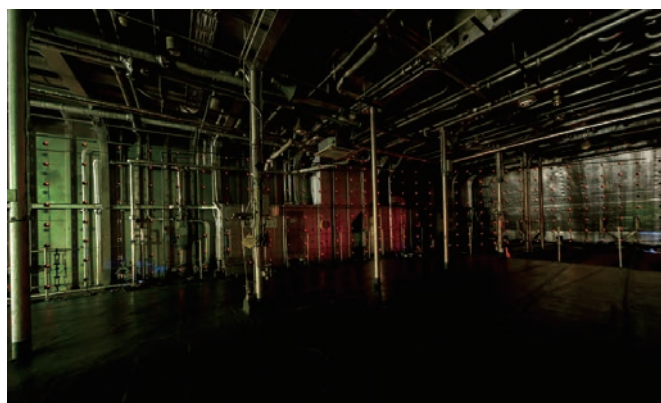
受賞作品展は2019年6月1日（土）～16日（日）

日本科学未来館（東京・お台場）を中心に開催。

この度、第22回文化庁メディア芸術祭の受賞作品及び功労賞受賞者を決定いたしました。文化庁メディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。今回の作品応募では、4,384作品が寄せられ、過去最多となる世界102の国と地域から応募がありました。厳正なる審査の結果、部門ごとに受賞作品（大賞、優秀賞、新人賞）と、功労賞としてメディア芸術分野に貢献のあった方を選出しました。

なお、これら受賞作品の展示・上映や関連イベントを実施する第22回の受賞作品展を、2019年6月1日（土）から6月16日（日）まで、東京・お台場の日本科学未来館を中心に開催します。

■第22回文化庁メディア芸術祭 大賞受賞作品



アート部門

© Kouji Nishikawa

『Pulses/Grains/Phase/Moiré』 サウンドインスタレーション

古館 健 [日本]



エンターテインメント部門

© NHK (Japan Broadcasting Corporation)
All rights reserved.

『チコちゃんに叱られる！』 テレビ番組

「チコちゃんに叱られる！」制作チーム [日本]



アニメーション部門

© Sacrebleu Productions

『La Chute』 短編アニメーション

Boris LABBÉ [フランス]



マンガ部門

© boichi, Kodansha 2019

『ORIGIN』

Boichi [韓国]

広報問合せ先： 文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS内] 広報担当 瀬賀

Email : jmaf-pr@cgarts.or.jp Tel : 03-3535-3501 Fax : 03-3562-4840 ※受付時間：平日10時～18時
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-16

第22回文化庁メディア芸術祭 応募概況

募集部門：4部門（アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガ）

募集期間：2018年8月1日（水）～10月5日（金）66日間

■応募作品数

アート部門	
インタラクティブアート	230
メディアインスタレーション	250
映像作品	603
映像インスタレーション	208
グラフィックアート	1,073
ネットアート	55
メディアパフォーマンス	82
計	2,501

エンターテインメント部門	
ゲーム	61
映像・音響作品	271
空間表現	98
ガジェット	58
ウェブ	25
アプリケーション	34
計	547

アニメーション部門	
劇場アニメーション	57
テレビアニメーション	
オリジナルビデオアニメーション	
短編アニメーション	401
計	458

マンガ部門	
単行本で発行されたマンガ 雑誌等に掲載されたマンガ	708
コンピュータや携帯情報端末等で 閲覧可能なマンガ	49
同人誌等を含む自主制作のマンガ	121
計	878

応募作品総数	4,384
--------	-------

■海外からの応募

2,453作品／101ヵ国・地域（前回[第21回]2,262作品／97ヵ国・地域）

アイスランド、アイルランド、アラブ首長国連邦、アルジェリア、アルゼンチン、アルメニア、アンドラ、イエメン、イスラエル、イタリア、イラク、イラン、インド、インドネシア、ウクライナ、ウルグアイ、エクアドル、英国、エジプト、エストニア、オーストラリア、オーストリア、オマーン、オランダ、ガーナ、カザフスタン、カナダ、ガーンジー、カメルーン、ガボン、韓国、カンボジア、キプロス、キューバ、ギリシャ、クウェート、クロアチア、コスタリカ、コロンビア、サウジアラビア、ジョージア、シリア、シンガポール、ジンバブエ、スイス、スウェーデン、スペイン、スリランカ、スロバキア、スロベニア、セネガル、セルビア、タイ、台湾、中国、チュニジア、チェコ、チリ、デンマーク、ドイツ、トルコ、ナイジェリア、ニュージーランド、ネパール、ノルウェー、パキスタン、パナマ、パラグアイ、ハンガリー、バングラデシュ、フィリピン、フィンランド、ブラジル、フランス、ブルガリア、ブルキナファソ、米国、ベトナム、ベネズエラ、ベラルーシ、ペルー、ベルギー、ポーランド、ボツワナ、ボリビア、ポルトガル、香港、マルタ、マルティニーク島、マレーシア、南アフリカ、メキシコ、モルドバ、モロッコ、ヨルダン、リトアニア、リビア、リヒテンシュタイン、ルーマニア、レバノン、ロシア（五十音順）

■贈呈式・受賞作品展

贈呈式： 2019年5月31日(金)予定

受賞作品展：2019年6月1日(土)～16日(日), 日本科学未来館(東京・お台場)を中心に開催いたします。

■審査委員

アート部門

秋庭 史典 (美学者/名古屋大学准教授)
阿部 一直 (キュレーター/アートプロデューサー)
池上 高志 (複雑系科学研究者/東京大学大学院総合文化研究科教授)
ゲオアグ・トレメル (アーティスト/研究者)
森山 朋絵 (メディアアートキュレーター/東京都現代美術館学芸員)

エンターテインメント部門

遠藤 雅伸 (ゲームクリエイター/東京工芸大学教授)
川田 十夢 (開発者/AR三兄弟 長男)
齋藤 精一 (株式会社ライゾマティクス代表取締役/クリエイティブディレクター)
佐藤 直樹 (アートディレクター/多摩美術大学教授)
中川 大地 (評論家/編集者)

■選考委員

アート部門

伊村 靖子 (情報科学芸術大学院大学講師)
金澤 韻 (インディペンデント・キュレーター/十和田市現代美術館学芸員)
田所 淳 (クリエイティブ・コダー)
藤川 悠 (茅ヶ崎市美術館学芸員)
水野 勝仁 (甲南女子大学文学部メディア表現学科准教授)
渡邊 朋也 (美術家/タレント)

アニメーション部門

宇田 鋼之介 (アニメーション監督・演出)
木船 徳光 (アニメーション作家/ IKIF+ 代表/東京造形大学教授)
西久保 瑞穂 (映像ディレクター)
森野 和馬 (映像作家/CGアーティスト)
横田 正夫 (医学博士/博士(心理学)/日本大学教授)

マンガ部門

表 智之 (北九州市漫画ミュージアム専門研究員)
川原 和子 (マンガエッセイスト)
白井 弓子 (マンガ家)
西 炯子 (マンガ家)
みなもと 太郎 (漫画家/マンガ研究家)

マンガ部門

おぎの ひとし (マンガ家/東京工芸大学助教)
小田切 博 (フリーライター)
倉持 佳代子 (京都国際マンガミュージアム研究員)
西原 麻里 (愛知学泉大学講師)
松田 尚正 (マンガ家/京都造形芸術大学講師)
三浦 知志 (尚綱大学准教授)

■各賞

高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。
また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対し、
功労賞を贈呈します。

メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状, トロフィー, 副賞 100万円 新人賞：賞状, トロフィー, 副賞 30万円
優秀賞：賞状, トロフィー, 副賞 50万円 功労賞：賞状, トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。



前回[第21回]文化庁メディア芸術祭
贈呈式の様子

主催 文化庁メディア芸術祭実行委員会
問合せ先 文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS内]
Email : jmaf@cgarts.or.jp Tel : 03-3535-3501 (受付時間: 平日10時～18時)

スケジュール

2018年

2019年

8

10

3

6

募集期間

2018.8.1-10.5

審査期間

2018.10-

受賞発表

2019.3.1

受賞作品展

2019.6.1-16

■第22回文化庁メディア芸術祭 受賞一覧

	賞	作品名 作品形態	作者名 [国籍]
アート部門	大賞	Pulses/Grains/Phase/Moiré サウンドインスタレーション	古舘 健 [日本]
	優秀賞	Culturing <Paper>cut メディアインスタレーション、バイオアート	岩崎 秀雄 [日本]
		datum メディアインスタレーション	平川 紀道 [日本]
		discrete figures ダンスインスタレーション	真鍋 大度／石橋 素／ MIKIKO／ELEVENPLAY [日本]
		Lasermice メディアインスタレーション	菅野 創 [日本]
	新人賞	SPARE (not mine) インタラクティブアート	Jonathan Fletcher MOORE [米国]
		Total Tolstoy メディアインスタレーション	Andrey CHUGUNOV [ロシア]
		watage メディアインスタレーション	(euglena) [日本]
エンター テインメント 部門	大賞	チョコちゃんに叱られる! テレビ番組	『チョコちゃんに叱られる!』制作チーム [日本]
	優秀賞	歌舞伎町 探偵セブン 体験型ゲーム	『歌舞伎町 探偵セブン』制作チーム (代表:加藤 隆生/西澤 匠/平井 真貴/堀田 延/岩元 辰郎) [日本]
		LINNÉ LENS アプリケーション	LINNÉ LENS制作チーム (代表:杉本 謙一) [日本]
		Perfume x Technology presents “Reframe” パフォーマンス	Perfume+Reframe制作チーム (代表:MIKIKO)／真鍋 大度／石橋 素 [日本]
		TikTok アプリケーション	『TikTok』Japanチーム [日本]
	新人賞	水曜日のカンパネラ『かぐや姫』 ミュージックビデオ	水曜日のカンパネラ『かぐや姫』制作チーム (監督:山田 健人) [日本]
		春 映像作品	大森 歩 [日本]
		Pixel Ripped 1989 ゲーム	Ana RIBEIRO / Carlo CAPUTO / Julia LEMOS / Leonardo BATELLI / William RODRIGUEZ [ブラジル]
アニメーション 部門	大賞	La Chute 短編アニメーション	Boris LABBÉ [フランス]
	優秀賞	大人のためのグリム童話 手をなくした少女 劇場アニメーション	セバスチャン・ローデンバック [フランス]
		ひそねとまそたん テレビアニメーション	樋口 真嗣 [日本]
		ペンギン・ハイウェイ 劇場アニメーション	石田 祐康 [日本]
		若おかみは小学生! 劇場アニメーション	高坂 希太郎 [日本]
	新人賞	透明人間 短編アニメーション	山下 明彦 [日本]
		Am I a Wolf? 短編アニメーション	Amir Houshang MOEIN [イラン]
		The Little Ship 短編アニメーション	Anastasia MAKHLINA [ロシア]
マンガ部門	大賞	ORIGIN	Boichi [韓国]
	優秀賞	宇宙戦艦ティラミス	原作:宮川 サトシ/作画:伊藤 京 [日本]
		凧のお暇	コナリミサト [日本]
		百と卅	紗久楽 さわ [日本]
		夕暮れへ	齋藤 なずな [日本]
	新人賞	黄色い円盤	黄島 点心 [日本]
		見えない違い——私はアスペルガー	マドモワゼル・カロリーヌ/原作:ジュリー・ダシェ/ 訳:原 正人 [フランス/日本]
		メタモルフォーゼの縁側	鶴谷 香央理 [日本]
功労賞		池田 宏 アニメーション監督/アニメーション研究者	
		呉 智英 評論家	
		小池 一子 クリエイティブディレクター	
		三田村 駿右 筑波大学名誉教授	

アート部門

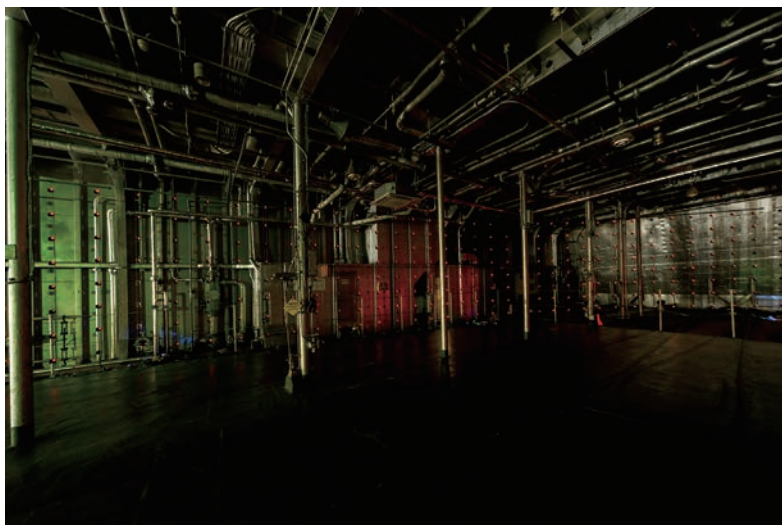
大賞

パルスィス グレインズ フェイズ モアレ

Pulses/Grains/Phase/Moiré

サウンドインスタレーション

古舘 健 [日本]
FURUDATE Ken



© Kouji Nishikawa

プロフィール

古舘 健

1981年神奈川県生まれ、京都在住。アーティスト／ミュージシャン／エンジニア。自身の主催するサウンドアートプロジェクト「The SINE WAVE ORCHESTRA」にてPrix Ars ElectronicaのHonorary Mention(2004)、第21回文化庁メディア芸術祭アート部門審査委員推薦作品(2018)、CYNETART AWARDS(2018)に選出。個人では2018年デジタルショック賞(2018)、CYNETART AWARDS Finalist(2018)に選出。
<http://ekran.jp/kf>

作品概要

300台を越えるスピーカーとLEDライトを使用した、大規模なサウンドインスタレーション。2018年1月から3月にかけて開催された「AOMORIトリエンナーレ2017」のプログラムのひとつとして、青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸で初めて発表された。コンピュータで制御される自作のジェネレーターに接続されたスピーカーがそれぞれ個別のパターンで音を発生する。また、各スピーカーに付随するLEDライトも、スピーカーの発音パターンに合わせて同じタイミングで明滅する。各個のスピーカーは一定の規則にしたがった単純なクリック音とLEDの発光しか行わないが、それらが鑑賞者を囲うように壁面一体に設置され、音と光が重層的に合わさることで、複雑なレイヤーが存在する新たな音響環境を形成する。照明を控えた空間の中で、多様なパターンを持った音と光が複合して有機的な波のようになり、鑑賞者の視覚と聴覚に向かって次々と押し寄せることになる。これまでサウンドアートプロジェクト「The SINE WAVE ORCHESTRA」のメンバーとして、ミニマムな要素と特性を拡張させて複雑な音響現象をつくり上げてきた作者。本作は初のソロインスタレーションとして、その作家性と創作の志向が存分に発揮された。

贈賞理由

大量のスピーカーとLEDを壁一面に基盤の目のように配置し、絶え間なく明滅する光のパターンとスイッチのような機械的サウンドが持続的に同期し、漆黒の巨大な空間を充満させている。現在は詳細で大量なデータがつくり出す過剰性に世界が翻弄されている時代である。その人の知覚を超える過剰性が2010年以降のデジタル世界を象徴するものとするれば、本作品はそれをアナログ的に現実世界に再構築した作品とみなすことができる。作者は大量のミニ・スピーカーとLEDを地道に配線しマイコンで制御することで、この巨大なシステムに生命性をインストールした。ぶっさらばうに生成される音と光の空間は、周期的なパターンとアナログ的なゆらぎによって自己組織化し、あたかもひとつの有機的な建築物の中にいるような体験をすることができる。この作品の持つ建築的で強度ある空間に入ること不思議な心地よさがあるのは、そうした生命性ゆえかもしれない。(池上 高志)

エンターテインメント部門

大賞

チコちゃんに叱られる！

テレビ番組

『チコちゃんに叱られる！』制作チーム [日本]
"Chico Will Scold You!" Production Team



© NHK (Japan Broadcasting Corporation) All rights reserved.

プロフィール

『チコちゃんに叱られる！』制作チーム

小松 純也 | 1967年兵庫県生まれ、共同テレビジョンプロデューサー。
水高 満 | 1968年東京都生まれ、NHK制作局制作推進チーフプロデューサー。
西ヶ谷 力哉 | 1970年静岡県生まれ、NHKエンタープライズプロデューサー。
中島 由布子 | 1972年神奈川県生まれ、共同テレビジョンプロデューサー。
河井 二郎 | 1973年茨城県生まれ、共同テレビジョンプロデューサー。

作品概要

何でも知っている5歳の女の子という設定のキャラクター「チコちゃん」が、素朴な疑問を明らかにしていく番組。「お別れするとき、手を振るのはなぜ?」「乾杯のときのグラスをカチン、なぜするの?」といった日常のなかで生まれる疑問を、スタジオでお笑い芸人の岡村隆史やゲストに投げかけながら、専門家のインタビュー映像によって回答していく。チコちゃんの着ぐるみは複数台のカメラで撮影されたうえで、放映時に頭部を3DCGのモデルに置き換える処理が行われている。置き換えられる頭部パーツは着ぐるみの頭部を精緻に3Dスキャンしたものであり、本当に着ぐるみの顔のパーツが動いているかのような表現を、目や口の形を自在に変えることで実現している。3DCGによる頭部パーツは、頭を突然大きくしたり、変顔をするなどのマンガ的な演出も可能にしており、チコちゃんというキャラクターが強い実在感をもって、スタジオでゲストと掛け合う様子が人気を博した。番組ゲストが質問に答えられなかった際に、チコちゃんが頭を大きくしながら叱る恒例のセリフ「ポーっと生きてんじゃねーよ!」は2018年の新語・流行語大賞の候補に選出。世代を問わず広い支持を集めている。

贈賞理由

好奇心旺盛で何でも知っている5歳の女の子、東京・白金に住なのに時々関西弁になるチコちゃんが、何気ない疑問を投げかけるNHKのバラエティ番組。クイズ形式だが正解を競うのではなく、諸説あるなかから最初はボカーンだが説明を聞けばフーンと納得できる話題を提供する。テレビという媒体でも、こんなつくり方で新しいエンターテインメントを表現できるという、荒唐無稽だが日本人の感性にマッチした挑戦的作品である。その中核となるのが、2.5頭身の着ぐるみ頭部を3DCGで置き換えたキャラクターで、昭和なおかつ頭とレトロ感のあるセットは、CG合成であることを意識させない。しかし決め台詞の「ポーっと生きてんじゃねーよ!」で見せる異形への変化が、日本でしか生まれないだろう強いアクセントになっている。2017年の初回放送から各部のバージョンアップが見て取れるが、チコちゃんをかわいく見せたいというスタッフの親心にほかならない。(遠藤 雅伸)

アニメーション部門

大賞

La Chute

短編アニメーション

ボリス ラベ
Boris LABBÉ [フランス]



© Sacrebleu Productions

プロフィール

Boris LABBÉ

1987年フランス、ラムサン生まれ。アーティスト、映像作家。フランスとスペイン(マドリッド)にて活動する。タルブ芸術・陶芸学校にて映像芸術資格修得後、アングレームのアニメーション専門学校EMCAにて学ぶ。伝統的な手法とデジタル技術を取り入れてつくられる映像作品は、循環と再生をテーマにしている。

作品概要

ダンテ・アリギエーリの『神曲 地獄篇』に着想を得た短編アニメーション。墨汁と水彩絵具による約3,500枚の絵をデジタル編集し、そこに弦楽奏の断片的な響きと電子音によるオリジナルの音楽が重ねられる。シーンは前半の地上と天上、そして後半の地獄界と大きく分かれる。種のようなものがあり、そこから根が伸びることで形づくられる地上では、植物と人間が互いの姿に変容しながら命が循環している。その上空では、鳥のようでもあり人のようでもある姿をした天の住人が渦を描いて舞っている。墨絵の白と黒を反転させることで独特の暗さを持つ画面のなか、植物、人、天の住人の中心部では鮮やかな色が躍動し、生命力が表現される。やがて地上には、楽器のような道具や建物が現れる。中盤、天の住人が舞い降りて地上の住人と交わると巨人が誕生した。巨人は地上人を食べ、地上人たちは争い、世界の破壊が始まった。やがて天上人が地上に墜落し、地獄が誕生する。ルネサンス期のサンドロ・ボッティチェリから、ピーテル・ブリューゲル1世、フランシスコ・デ・ゴヤ、ヘンリー・ダーガーまで、西洋美術史を彩る巨匠の作品を参照しながら、循環、変容、墜落と再生という壮大なテーマを描く。

贈賞理由

究極の眺める作品であり、感じる作品である。重く、暗く、淡々と描かれる世界は平静を保ちながら見ることを拒むかのようで胸が騒ぐような感情を常に抱かせる。執拗に続く反復表現、動きあるパーツたちはパズルを組み合わせるかのごとくさまざな空間に配置され、浮遊するような視点をもって全貌を見ることができる。全篇に流れるサウンドは映像と同様にミニマムかつシンプルな組み合わせで独特の世界を生み出すことに成功し、映像と混じりあうことで妖しい世界をさらに助長させている。作者の類まれなるセンスを感じる表現は、誰もが到達できるレベルではなく、観念せざるを得ないような境地を抱かせ、アート作品としての力強さと存在感を感じる。個々の小さな個性が集まり集合体の個性を生み出すさまは、現実の人のあり方をも連想させる。混沌と混乱、調和とで独自の美を生み出し、ミニマルアニメーションとして隙のない、非常に完成度の高い作品に仕上がっている。(森野 和馬)

マンガ部門

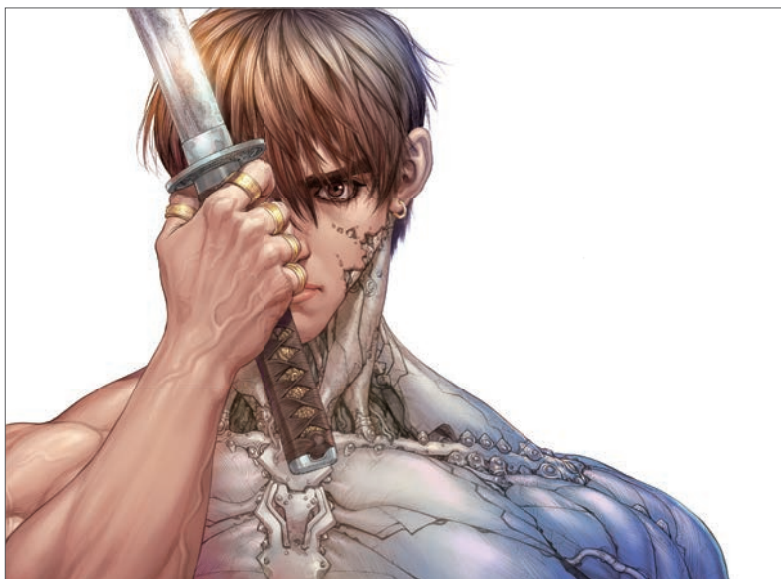
大賞

オリジン

ORIGIN

ボウイチ

Boichi [韓国]



© boichi, Kodansha 2019

プロフィール

Boichi

超絶技巧の絵と痛快なストーリーで海外にも多くの読者を持つ。主な作品に『Boichi作品集 HOTEL』(2009)、『サンケンロック』(06-16)、第21回文化庁メディア芸術祭マンガ部門審査委員会推薦作品『Dr.STONE』(原作：稲垣理一郎、17-) などがある。

作品概要

作品の舞台となるのは、あらゆる犯罪が流れ込む大都市となった西暦2048年の東京。そこでは限りなく人間に近い外見を持つ超高性能なAIを搭載したロボットたちにより、夜な夜な殺人が繰り返されていた。そんなロボットたちと敵対する主人公が、人間社会に溶け込むプロトタイプのロボット、オリジンである。オリジンは田中仁の名で世界企業AEEに入社し、自己のバージョンアップを繰り返しながら、科学者「父さん」につくられた兄弟ロボットたちと戦っている。オリジンは感情を持たずAIのプログラムに従って行動するが、彼の前に立ちはだかるロボットたちのリーダーには感情が芽生えており、オリジンが理解できない復讐心により襲いかかってくる。生き残るために合理的な判断を続けるオリジンは、一方でいつか自分にも感情というものが生まれることを期待している。その二重性は、読み手に人間の持つ感情の由来や意味を問いかける重要な要素と言える。20kgを超える炭化タングステン超合金の日本刀を武器に、時には自らの身体の破壊を顧みずに敵に向かっていくオリジンの戦いを、細密な書き込みと高い画力により描写した。細部まで描き込まれたSF設定と、ハードボイルドな世界観が、読者を強く惹きつける。

贈賞理由

まず絵に圧倒される。まつげの1本1本、ひそめた眉のわずかな陰影も見逃すまいとする精緻極まるキャラクターの作画。これらが可能にするのは、記号によらない複雑な感情の表現だ。あるいは、感情の「無さ」の表現(それはこの作品には必要不可欠なものだ)。また、かつての名作短編『HOTEL』で見せたSFとしてのつくり込みも健在である。30年後という難しい時代設定を豊富な知識とイマジネーションでリアルに描き出す、その力量に舌を巻く。一方で生活感あふれるパートや、激しいバトル描写と主人公に感情が無いこととの対比がもたらす何とも言えないユーモアもこの作品の特筆すべき点で、審査委員を沸かせた。凄惨なバトルシーンや女性の描き方など読者を選ぶ面もある。だがこの、母国を離れ日本を創作の場とした作者の魂が込められた作品のハイレベルさが、さらなるマンガの可能性を見せてくれたことは確かである。(白井 弓子)

功労賞

池田 宏

IKEDA Hiroshi

アニメーション監督／
アニメーション研究者

プロフィール

1934年、東京都生まれ。59年、日本大学を卒業、現・東映アニメーション株式会社が公募した演出助手第1期生として入社。劇場用長編『空飛ぶゆうれい船』(1969)、『どうぶつ宝島』(1971)、テレビ短編『魔法使いサリー』(1966-68)、『ひみつのアッコちゃん』(1969-70)などの脚本・演出を担当。74年、研究開発室課長(～室長)。アニメーション製作のコンピュータ化の研究開発に従事する。85年に退社、任天堂株式会社に入社、情報開発部長としてゲームソフトの開発を担当。兼任で、株式会社マリオの代表取締役社長、招布株式会社の代表取締役社長を歴任。99年任天堂株式会社を退社。2001年徳間記念アニメーション文化財団評議員。1971年より日本大学、女子美術大学、沖縄県立芸術大学などの学部、大学院などの兼任講師。2003年、東京工芸大学アニメーション学科教授。その後、宝塚造形芸術大学教授などを歴任。現在、宝塚大学兼任講師在任。

贈賞理由

テレビシリーズの『ハッスルパンチ』(1965-66)『魔法使いサリー』『ひみつのアッコちゃん』、劇場用長編『空飛ぶゆうれい船』『どうぶつ宝島』の脚本や監督などを担当。その後、アニメーション制作のコンピュータ化についての研究開発に携わり、一方で日本大学芸術学部、女子美術大学、沖縄県立芸術大学、東京工芸大学、宝塚大学などにおいてアニメーション教育に従事し、日本映像学会、日本アニメーション学会の設立にも貢献、さらに『アニメーションの事典』(朝倉書店、2012)などの編著者を務めるなど、アニメーションの教育研究の発展に大きく寄与したことは功労賞に値する。(横田 正夫)

呉 智英

KURE Tomofusa

評論家

プロフィール

1946年、愛知県生まれ。早稲田大学法学部卒業。日本マンガ学会元会長、現理事。京都国際マンガミュージアム研究顧問。東京理科大学非常勤講師、愛知県立大学非常勤講師、京都精華大学客員教授などを務めた。マンガ評論は学生時代から手掛ける。『現代マンガの全体像』(情報センター出版局、1986)は従来のマンガ評論の水準を一変させた。平田弘史『血だるま剣法・おのれらに告ぐ』の復刊(青林工藝舎、2004)に尽力するほか、多くのマンガ単行本に解説を執筆している。読書ガイド誌「ダ・ヴィンチ」には『マンガ狂につける薬』を17年間全200回連載した。マンガ評論以外に、社会・文化評論でも活躍し、『危険な思想家』(メディアワークス、1998)『言葉の常備薬』(双葉社、2004)『つぎはぎ仏教入門』(筑摩書房、2011)『現代人の論語』(文藝春秋、2003)など著書多数。最近刊は『日本衆愚社会』(小学館、2018)。テレビの討論番組にもたびたび出演し該博な知識と論理の鋭さで現代有数の論客として知られる。

贈賞理由

舌鋒鋭い評論家として著名な呉氏は、マンガ評論にも早い時期から取り組み、特に『現代マンガの全体像』は先駆的な評論書としてマンガ評論の質を向上させ、大衆文化であるマンガが批評・研究に値するジャンルであることを広く知らしめた。また、2001年設立の日本マンガ学会には立ち上げから関わり、会長や理事を務めた。長年、魅力ある書き手として活躍しながら、学会という研究の場にも寄与し続けた呉氏の、マンガ文化への多大な貢献を考えれば遅すぎるほどだが、贈賞をもってその功績を称えたい。(川原 和子)

功労賞

小池 一子

KOIKE Kazuko

クリエイティブディレクター

プロフィール

1936年、東京都生まれ。早稲田大学文学部卒業。80年の「無印良品」の創設に携わり、以来アドバイザリー・ボードを務める。また「現代衣服の源流展」(京都国立近代美術館、1975)、「ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館「少女都市」(2000)、「横尾忠則 十和田ロマン展 POP IT ALL」(十和田市現代美術館、2017)などの展覧会の企画、ディレクションを行う。1983年に日本初のオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」を創設・主宰し、内藤礼、森村泰昌、大竹伸朗、杉本博司など多くの現代美術作家を国内外に紹介した(～2000)。訳書に『アイリーン・グレイ』(みすず書房、2017)、編著書に『田中一光とデザインの前後左右』(FOIL、2012)、『イッセイさんはどこから来たの? 三宅一生の人と仕事』(HeHe、2017)など。武蔵野美術大学名誉教授。十和田市現代美術館館長。

贈賞理由

文化とは何なのか? 文化とはどのようにして創造され、どのように進化するのか? あたかも大きなムーブメントして捉えられる「文化」は、たどっていくとじつは数名の活動から始まっている。小池一子氏はまさに広告・ブランド・ファッション・ものづくりをはじめ、たくさんのデザイン・クリエイティブ分野の日本のあり方を創世記からつくった人である。高度経済成長時の日本で日本のデザインを哲学し、実行し、実装した功労を、広告やブランドが時代とともに役割を変えた今だからこそ称賛すべきだと考える。(齋藤 精一)

三田村 駿右

MITAMURA Shunsuke

筑波大学名誉教授

プロフィール

1936年、岐阜県生まれ。64年、東京教育大学芸術学科彫塑専攻卒業。66年から70年にかけて、スウェーデン王立美術院大学およびイタリア・フィレンツェ美術アカデミーに留学。帰国後、弘前大学講師を経て76年筑波大学芸術学系に転じ、〈総合造形〉コースの創設に携わった。87年教授、92年芸術学系長、95年芸術専門学群長。2000年退官し名誉教授。この間、80年からホログラフィー・アートに取り組み、96年Holography Award (Shearwater Foundation, USA.)。〈総合造形〉の教育では、造形制作を基礎にホログラフィーを含むメディア技術を取り入れ、ハイテクノロジー・アートからメディアアートへの動向を支えた。結果、岩井俊雄、明和電機、近森基、児玉幸子、クワクボリョウタ、タムラサトルら多くのメディアアーティストなどを輩出している。

贈賞理由

日本を代表するホログラフィー作家として、国内外でアート&テクノロジーの展示・教育プログラムに携わり、アルスエレクトロニカなどに招へい参加。グループ アール・ジュニ、ハイテクノロジー・アート国際展や多くの著作を通して先駆的に活動し、創設間もない筑波大学の総合造形領域に最初期の教授陣(山口勝弘、河口龍夫、篠田守男)を招き、ユニークなメディア芸術教育を展開した。「モノの芸術」と「メディアのアート」を両にらみで楽しむ教育精神でこの領域を支え、石原恒和、原田大三郎、岩井俊雄、明和電機ら多くのづくり手を輩出した貢献は大きい。(森山 朋絵)



第22回文化庁メディア芸術祭
広報用素材貸出申請書

「第22回文化庁メディア芸術祭」広報用として、下記のデータをご用意しております。貸出を御希望の方は、こちらの申請書に必要事項と希望素材のアルファベットを○で囲み、文化庁メディア芸術祭事務局広報担当瀬賀までお送りください。

【A】ロゴ式(zip) ※使用規定(pdf) 同封		【B】チラシ画像(jpg)	
【C】広報画像(zip)・・・[第22回]文化庁メディア芸術祭大賞受賞作品画像【1】-【4】.jpg 前回[第21回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子【5】-【8】.jpg			
【1】アート部門大賞	【2】エンターテインメント部門大賞	【3】アニメーション部門大賞	【4】マンガ部門大賞
【1】 〈クレジット〉 © Kouji Nishikawa 〈キャプション〉 第22回文化庁メディア芸術祭 アート部門大賞 『Pulses/Grains/Phase/Moiré』 サウンドインスタレーション 古舘 健	【2】 〈クレジット〉 © NHK (Japan Broadcasting Corporation) All rights reserved. 〈キャプション〉 第22回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門大賞 『チョコちゃんに叱られる!』 テレビ番組 「チョコちゃんに叱られる!」制作チーム	【3】 〈クレジット〉 © Sacrebleu Productions 〈キャプション〉 第22回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門大賞 『La Chute』 短編アニメーション Boris LABBÉ	【4】 〈クレジット〉 © boichi, Kodansha 2019 〈キャプション〉 第22回文化庁メディア芸術祭 マンガ部門大賞 『ORIGIN』 Boichi
【5】	【6】	【7】	【8】
〈キャプション／【5】-【8】共通〉 前回[第21回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子 提供:文化庁メディア芸術祭事務局			

＜広報画像のご使用にあたって＞
※広報画像のご使用は「第22回文化庁メディア芸術祭」をご紹介いただく場合に限りさせていただきます。フェスティバル終了後は使用できません。
※広報画像は全図でご使用ください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはお控えください。
※指定クレジットを必ず御記載いただきますようお願いいたします。またキャプションを可能な限り御記載いただきますようお願いいたします。
※校正ゲラを広報担当までお送りください。

貴社についてお知らせください

☐ 貴社名	☐ 媒体名
☐ 御担当者名	☐ 所属部署
☐ 御住所 〒	☐ Email
☐ Tel	☐ Fax
☐ 御掲載・放映の予定日	

広報問合せ先 文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当:瀬賀
Email:jmaf-pr@cgarts.or.jp Tel: 03-3535-3501 Fax: 03-3562-4840 ※受付時間:平日10時～18時
〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-16

＜個人情報の取り扱いについて＞
ご記入いただきました個人情報は、文化庁メディア芸術祭広報からの情報配信やご案内等必要なご連絡にのみ使用いたします。許可なく第三者に個人情報を開示することはありません。